

小学校体育授業における幼児教育との接続

「遊び」概念を軸とした枠組みの移行に向けて

Connecting with Kindergartens to Elementary Schools
in Physical Education Classes

: For Transition of Framework Centering on the Concept of “Play”

浅尾 秀 樹 長 津 詩 織
Hideki ASAO Shiori NAGATSU

I はじめに

本稿における「幼小接続の課題」および「遊びを通して学ぶ」を考察するにあたり、一例を紹介する。ある町で行われた教育研究会での出来事である。この研究会は町内の全ての小学校、中学校、高等学校の教員による教育研究会である。年に一度開催され、午前中に小中高での授業公開があり、午後に出席者による研究討議が行われ、対照的な事象が明らかとなる。小学校では、教師の問いかけと児童の活発な発表、意見交換等を主軸とした、いわゆる「活発な活動による授業」が展開される。高校では教師による一方的な説明、板書とそれをノートする高校生の姿が対照的である。この時の高校生は、「活発な活動による授業」で学んでいた子どもたちであり、小学校の教員たちはその数年後の姿を目の当たりにしているわけである。午後の研究討議の時間になり、高校の教師からの主張を要約すると、「小学校で基礎的事項をしっかり教えてもらわないと、高校での授業が成立しない」というのである。多方、小学校の教師からは「子どもたちの学ぶ姿は、すっかり変わってしまった。子どもの理解など二の次で、教科書の説明・解説で進められる授業では、子どもたちの学習意欲は喚起できない」というのが双方の主張点である。幼小接続をさらに拡大して考えると、実にわかりやすい例といえる。

本稿における「遊びを通して学ぶ」ことに内在する難しさを、先にあげた事例について教育方法の視点から考察すると多くのことが見えてくる。「学び」が成立するにはいくつかの要因が必要である。例えば、学び手には発達段階に応じた学びの手順がなければ学習は成立しない。また、これまでの経験と興味・関心から意欲喚起される題材、なおかつ、他者との関わりとして学びが行われることが必要である。しかし、社会は学習者に対して、科学や文化の側面から何が分かったのかを求めることから、限られた時間での成果重視、学問的知見の継承伝達が重視されるため、学び手は受け身にならざるをえない。こうした状況にある教員は、学び手の理解優先よりも教えたことの事実が重要なのであり、教科によっては概念理解にいていねいな手立てをするよりも、方法・手段だけを説明し慣れさせる「狭義の教育」が横行してしまうのである。

あらためて「遊びを通して学ぶ」を考えてみると、科学・文化の継承・伝達を一方的に行うのではなく、「教科学習」として学び手の生活経験や興味・関心に応じた学習内容（教材）により、「何を学ぶ」かと「何によって学ぶ」かを、学び手の状況に応じて「学ばせる」のが初等教育の役割の一つといえる。学習者の興味・関心、発達段階を前提としていること、学習者相互の働きかけにより学習が行われること、そして、自らの習熟度により学びの水準が向上していくことを可能とできるのが、体育科教育における「遊びを通して学ぶ」ことなのである。

II 本稿の課題と背景

小学校体育授業において、特に低学年では「遊び」の要素が強調されている。2017年3月に告示された新学習指導要領でも「体づくり運動」から「体づくりの運動遊び」へと表現が変更されるなど、その傾向はますます強まっている。運動を遊びとして楽しみつつ、他者とともに体を動かし、考えたことを他者に伝え、意欲的に取り組むなかで基本的な動きを身に付けることが、低学年の体育授業の大きな目的といえる。

低学年の体育授業のなかで遊びが強調されるのは、「遊びを通して学ぶ」という論理のもとでおこなわれる幼児教育との接続が想定されているためと考えられる。幼児教育と小学校との円滑な接続が図られて久しく、各地では多種多様な取り組みがおこなわれている。新学習指導要領でもまた、「幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること」と明記されたことから、教育現場では今後もさらなる取り組みが求められることになるであろう。

体育授業における幼児教育との接続を想定した場合、足がかりとなるのは低学年における「体づくりの運動遊び」の領域である。基本的な動きを身に付け、多様な動きを経験することが目標であるこの領域と深く関連する内容が、幼児教育でも「幼児期運動指針」において求められているからである。「体づくり」領域は約20年前から学習指導要領に加えられ、2008年からは低学年でも実施されるようになった。その背景には、「一向に改善されることのない子どもたちの体力・運動能力低下に対する国家的対応」があるともいわれ、体力・運動能力向上や新体力・運動能力テストの点数を上げるためのトレーニングと化している例も散見されるという（吉田 2016a, p.74）。一方で、遊びを重視するあまり「児童に好きな運動遊びをさせているだけで、多くの動きが経験できない授業が見られる」との指摘もあり（阿部 2008, p.1）、低学年体育は実践レベルで両極の課題を抱えているといえる。

本稿では、幼児教育との接続に着目しながら、小学校低学年における体育授業の現時点での到達点と課題を先行研究の検討によって明らかにすることを試みる。低学年の体育には「器械・器具を使つての運動遊び」や「走・跳の運動遊び」などの6つの領域があるが、本稿ですべてを扱うことは困難であるため、上記の理由から議論の契機として「体づくりの運動遊び」に焦点化する。それにより、小学校低学年の体育授業および幼児教育との接続を考察するための視

角を析出することが、本稿の課題である。

Ⅲ 体育授業からみた幼児教育との接続

幼児教育と小学校低学年との体育授業における接続をテーマとした研究として、吉田伊津美の論考があげられる（吉田 2016a, 2016b）。この調査は幼稚園の4・5歳児クラスおよび小学1・2年生の各担任教諭に対しておこなわれ、抽出された45種の基礎的運動パターンが、クラスの園児・児童にそれぞれどの程度の頻度でみられるかを観察評価したものである¹⁾。

その結果、幼稚園の年長児では多様な基礎的運動パターンが高頻度で現れているのに対し、小学校1年生は年間を通して頻度の高い動きが少なく、まったくみられない動きもあることが明らかになった。小学校2年生ではやや回復傾向にあるものの、年長児には及んでいない。端的に言えば、多様な動きを頻繁に経験してきた幼稚園の年長児であったにもかかわらず、小学校に進学すると限られた動きしかみられなくなるということである。ひとつの事例研究から過度の一般化はできないが、「小学校1年生の体育の授業では幼児期の経験を踏まえた内容にはなっておらず」、基礎的運動パターンの観点からみれば、幼児教育との接続は十分に図られていない可能性が見出せる（吉田 2016b, p.53）。

このような結果が得られた理由として、吉田は「教師による『遊び』の捉え方の違い」をあげ、「小学校での活動は子どもにとっての遊びとはなっておらず、ある活動を与えることが中心になっているのではないだろうか」と分析している（吉田 2016a, p.78）。前述の通り、小学校低学年の体育授業では遊びの要素が重視されており、発達特性や興味・関心等の「個に応じた視点」をもちつつも、「自由度の高い、個々が自己決定できる内容で行える」ことが特徴である（同上, p.80）。しかし吉田の分析に従えば、教員が提示した枠組みのなかで子どもが決まった動きを繰り返す、という授業の様子が想像される。仮にそうであるならば、低学年の体育授業の目標と異なるばかりでなく、遊びを通して多様な動きを経験するという幼児教育とも相容れない教育方法がとられており、それによって接続が困難になっていると予想される。

遊びの要素が重視されているはずの低学年の体育授業が、なぜ「活動を与えること」になりがちで、基礎的運動パターンの多様性が確保できないのであろうか。「体づくりの運動遊び」に関する先行研究では、主に二つの要因が提示されている。第一に体育授業の内容に関する課題、第二に体育授業を支える枠組みの課題、である。

1) 対象となった幼稚園の年長児はほとんどが対象の小学校へ進学している。また、対象の小学校に就学する児童は、対象の幼稚園の卒園児が約半数を占めるとのことである（吉田 2016b, p.49）。

IV 体育授業の内容に関する課題

まず、授業をおこなう教員が、体育授業あるいは「体づくりの運動遊び」に対して前向きに取り組めない状況がある。

一つには、前提として教員の専門性の問題があげられる。周知の通り、小学校では基本的に担任となった教員がそのクラスの児童に全教科を指導するという方法がとられている。教員それぞれに得意・不得意があるのは当然であるし、体育授業の準備にばかり時間をかけられるわけでもない。特に低学年は体育の専門でない教員が多く、体育の教科担任制の実施も高学年に比べて低いことも指摘されている（鬼澤・安原・内藤 2017, p.72）。このような場合、同学年で2クラス以上の合同授業をおこない、体育指導を得意とする教員がリーダーとなって授業を進める方法がとられることもある。しかし、少子化が進展し1学年1クラスとなった小規模な学校ではこのような対応も不可能であり、低学年に配置される体育指導が得意でない教員にとってはますます不利な状況となっている。

もう一つは、多様な動きを経験することに焦点化した「体づくりの運動遊び」という領域に対して、アプローチのしにくさが指摘されている。「走・跳の運動遊び」や「ゲーム」等の領域とは異なり、いわば「完成形」のない「体づくりの運動遊び」では、一般的なスポーツ種目のような「明確な素材」を見出しにくい。そのため、「学校現場での共通認識やゴールイメージが形成されにくい」（高田・筒井 2017, p.186）、「何をどう扱えばいいのかイメージが沸かない」（佐藤 2017, p.28）のが実態であるという。

例えば高田康史・筒井愛知が実施したアンケート調査によると、「体づくり」を単元として実施している教員は2割に過ぎず、7割以上は他の単元におけるウォームアップとして用いているという（高田・筒井 2017, pp.180-181）。その理由として、毎時の授業で繰り返し実施することで効果があると考えられていると同時に、実施内容に苦慮し、「他の領域より優先度が低く捉えられていること」も示唆されている（同上, p.181）。調査結果では、実施される動きの内容も限定されていることが読み取れ、「体づくり」を実施している場合でもさらなる改善の必要性が主張されている（同上, pp.181-182）。

学習指導要領に「体づくり」の領域が加わって以降、ある程度の授業実践が蓄積されているものの、高田・筒井の調査からは、学校現場においてそれらが十分活かされていないことがうかがえる。改善方策として提案されるのが研修の充実である。十分な到達目標や活動内容が捉えにくい「体づくり」の研修は、経験年数を問わず多くの教員が望んでいるとの調査結果もある。（鬼澤・安原・内藤 2017；高田・筒井 2017）。また、情報を得る手段を確保することも、改善点としてあげられている。特に運動指導全般に不安を抱える若手教員は、不安であるにも関わらず「体育授業に関する情報を得ようとしてない、もしくはその段階でつまづいている」という傾向もみられる（鬼澤・安原・内藤 2017, p.79）。以上のような先行研究では、研修の機会を量的・質的に充実させることや、若手教員に情報を得る手段を伝えることの必要性が示

されているといえる。

V 体育授業を支える枠組みの課題

前項では授業内容に関する課題と改善方法に関して検討してきたが、次に、体育授業を成立させる枠組みの問題に着目する。幼稚園・保育所や小学校など、それぞれの環境における中心的なやり方のことを、無藤隆は「参加の型」と表現し、「最初の段階にそれへの適応指導をすることは实际的」であると述べている（無藤 2009, pp.131-132）。

小学校1年生の体育や音楽の授業等を観察した白川佳子らの研究では、この「参加の型」の獲得過程が具体的に描かれている（白川・東・西島・荒松・秋本・新井・美甘・伊藤・栗原・吉田・上野 2009；白川・東・西島・荒松・中島 2010）。例えば、1学期の授業では体育館への移動や靴の履き替え、体操の隊形になることなど、授業の内容に入るまでの様々な段階において、達成するまでの個人差が大きいことが観察されている（白川・東・西島・荒松・秋本・新井・美甘・伊藤・栗原・吉田・上野 2009, pp.53-55）。排泄に関する以下のエピソードは、小学校1年生の授業風景の典型例であると考えられる。

授業が始まって約20分くらい経ち、次の活動のために移動している時に、一人の生徒が「先生トイレ行ってきます。」と発言し、それに対して、教師が「はい、授業中なの忘れないでよ。」と注意しつつも許可したため、半数くらいの子どもがトイレに走りだした。そこで、教師も驚いて、「本当に行きたい人だけ行きなさい。授業の前にちゃんと行きなさいって言ったよね。」と注意をうながした。（白川・東・西島・荒松・中島 2010, p.108）。

事例において多くの子どもが授業中に排泄へ行った理由として、白川らは「運動場へ移動するのに時間がかかるため、トイレを我慢した」可能性を指摘している（同上, p.108）。これに関連して、休み時間の過ごしかたに慣れていないことが背景にあるとも予想される。小学校では授業の時間と休み時間が区別され、休み時間には教員の指導がなくても必要な行為をすることが求められる。これは休み時間という発想のない幼稚園との大きな違いであり、小学校1年生では休み時間の適切な過ごしかたの指導がなされることになる（白川・東・西島・荒松・秋本・新井・美甘・伊藤・栗原・吉田・上野 2009, p.62）。前時の片付け、次の授業の準備、その合間の排泄や水分補給など、休み時間を適切に使えることは、体育に限らず小学校以降の授業を成立させるための前提条件となる。

小学校における「参加の型」は、短期集中的か緩やかかの違いはあっても、低学年のうちには獲得することが望まれる。言いかえれば、低学年では「本来の教育の中身」ではなく「参加の適応の仕方を教えている」（無藤 2009, p.132）ような状況になる場合もある。このような「参加の型」の獲得過程と照らし合わせれば、前出の吉田の調査の結果は、授業内容を改善す

ること以前の問題も示唆していると考えられる。すなわち、「参加の型」がまだ獲得されていない小学校1年生の授業では、授業内で多様な運動をおこなうに至るまでの時間が確保できないということである。

それならば、幼稚園・保育所の段階で小学校の「参加の型」に適応できるような取り組みをおこなえば円滑に接続できるかといえ、問題はそう単純ではない。小学校と同様に、幼稚園や保育所でみられる「参加の型」にも歴史的な蓄積があり、発達段階をふまえたそれなりの意味をもつものであるから（無藤 2009, p.131）、どちらか一方に合わせるのは現実的ではないだろう。保育または授業を成立させる枠組みを理解し合い、移行期の課題と実践的な対応を共有することが、体育授業においても、学校生活全体においても、円滑な接続を目指す上での起点になると考えられる。

特に体育授業では、学習指導要領で「集合、整頓、列の増減などの行動の仕方を身に付け、能率的で安全な集団としての行動ができるようにするための指導」をすることも盛り込まれており、他の授業にも共通する「参加の型」を獲得することが目標の一部となっている。それにもかかわらず、本稿で確認してきたような保育および授業内容の研究に比して授業の枠組みに関する研究は数多くないため²⁾、今後検討の余地がある。

VI 結論

本稿では、小学校低学年の体育授業の課題について、幼児教育との接続に着目しながら先行研究を検討し、現時点での到達点を知るとともに、課題改善のための視角を得ることを試みた。その結果、授業内容の改善に関する課題と、授業を成立させる枠組みの課題という、大きく分けて二つの視角が確認された。

授業内容の工夫については、研修の充実および教員が情報を得る手段の確保が指摘されていた。これらのような教員自身の研鑽はもちろん重要であるが、近年広く知られるようになってきた教員の多忙さを鑑みると、それを可能にする環境づくりも要すると考えられる。いくら体育授業の重要性を伝え、教員がそれを理解していても、体育授業にばかり注力することは困難である。また、学校の規模や地理的条件、気候など、地域的条件によって具体的な授業実践は変更されるであろう³⁾。個別の学校や地域に固有の課題を見出し、実践方法を検討していくこ

2) 関連する指摘として、鬼澤らの研究では、30年以上の経験をもつ教員は約束事を守るなどの「学習規律が確立された授業であるものの、『生活指導のための体育授業』となっている可能性がある」と述べられている（鬼澤・安原・内藤 2017, p.83）。

3) 一例として、へき地小規模校における体育授業があげられる（高瀬・中島 2015）。一学年の児童数が限られ、複式学級で授業運営される可能性もあるへき地小規模校では、人数を要する種目の実施が困難ななかで体育授業をおこなうことになる。しかし、へき地校の低学年体育授業については、学術研究として発表されているものは管見ながら見当たらない。少子化の進展が見込まれる現在、都市を標準とした条件下では授業が不可能な場合の授業実践についても、検討が必要になるだろう。

とも、体育科教育の研究における重要な領域のひとつである。

自ら活動しながら学ぶという学習方法をとる体育授業は、幼稚園や保育所等の保育形態に近く、長時間の座学よりも馴染みがある形態であると思われる。体育授業においては多様な動きを身に付けるという個人目標の達成が、学習者と教員あるいは学習者同士の相互行為のなかでなされることが目指される。それは幼児教育における「遊びを通して学ぶ」ことの延長線上にあると考えられ、幼児教育と小学校体育授業の接続「遊び」概念を軸として図られる可能性を見出すことができる。

次に、「参加の型」と表現されるような授業を成立させる枠組みに照射することで、体育科教育の研究に新たな視角が提示される可能性が見出された。授業内容の質の改善に関する研究がより一層充実することは、もちろん必要不可欠である。ただ、小学校の体育授業はそれ独自で完結しているのではなく、通時的・共時的なつながりのなかに位置づいている。特に本稿で着目した低学年体育の内容を充実させるためには、幼児教育からの「参加型」の接続を考慮せざるを得ないことは、すでに述べたとおりである。

体育授業を充実させ、目的を達成するための方法論は今後も研鑽されていくであろう。しかし、学校体育の研究は狭義の方法・手段の伝達技術に閉じられたものではない。「接続」という概念もまた同様であろう。幼児が学校という空間へ移行し、生活し、授業に参加するための身の処し方を獲得する過程を論じることもまた、広い意味での「体育」の研究といえるのではないだろうか。

なお、執筆担当部分は、Ⅰ：浅尾秀樹、Ⅱ～Ⅵ：長津詩織である。

文献

- 浅尾秀樹（2011）「おにごっこ」について考える『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要』第11号，pp.73-79.
- 阿部幸弘（2008）「体をスムーズに動かすことを目指した低学年の体育授業：多くの基本動作を取り入れた運動遊びを通して」『平成20年度神奈川県体育センター長期研修研究報告書』.
- 赤木信介・田部絢子・石川衣紀・内藤千尋・高橋智（2016）「就学前教育と小学校の接続・連携に関する調査研究：『松江市保幼小接続カリキュラム』の検討を通して」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ』67，pp.53-68.
- 鬼澤陽子・安原志帆・内藤年伸（2017）「小学校の体育授業の充実を目指した基礎的研究：群馬県における低学年の体育授業の実態調査を通して」『群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編』52，pp.71-86.
- 無藤隆（2009）『幼児教育の原則：保育内容を徹底的に考える』ミネルヴァ書房.
- 大友智（2012）「体育科教育学の立場からみた体育の授業研究の成果と課題：学習者行動研究

- の観点から」『体育科教育学研究』28 (2), pp.37-45.
- 佐藤善人 (2017) 「エビデンスベースの『体づくり運動』を求めて」『体育科教育』65 (12), pp.28-31.
- 白川佳子・東ゆかり・西島大祐・荒松礼乃・秋本篤志・新井孝昇・美甘亜耶・伊藤由美・栗原由佳・吉田彩花・上野高裕 (2009) 「幼小連携のカリキュラムについての一考察：小学1年生の「体育」「音楽」の授業観察を通して」『鎌倉女子大学紀要』第16号, pp.51-63.
- 白川佳子・東ゆかり・西島大祐・荒松礼乃・中島朋紀 (2010) 「幼小連携のカリキュラムについての一考察 (その2) : 小学1年生の「朝の会」「体育」「音楽」の授業観察を通して」『鎌倉女子大学紀要』17, pp.103-111.
- 高田康史・筒井愛知 (2017) 「岡山県小学校における体づくり運動の実施に関する一考察」『吉備国際大学研究紀要 (人文・社会科学系)』27, pp.177-188.
- 高瀬淳也・中島寿宏 (2015) 「へき地小規模小学校におけるゴール型授業の事例研究：バスケットボールにおける状況判断とサポート行動に着目して」『北海道体育学研究』50, pp.103-112.
- 吉田伊津美 (2016a) 「小学校低学年の授業を考える」橋本美保・田中智志監修／松田恵示・鈴木秀人編著『教科教育学シリーズ⑥体育科教育』一藝社, pp.74-80.
- 吉田伊津美 (2016b) 「幼稚園の運動遊びおよび小学校低学年体育で観察される基礎的運動パターン」『発育発達研究』70, pp.48-54.